

1. 背景と目的

近年における地方分権改革の一環として、全国で市町村合併に対する活動が活発化している[1]。合併による広域な行政政策により、高齢者などへの福祉サービスの充実、文化・スポーツ施設などの公共施設の広範な利用など、より充実した行政サービスを地域住民に提供できるとしている。しかし一方で、小さな生活単位として守り続けてきた集落の歴史や文化が合併という大きな流れの中で消失していくことや、行政の広域化によって従来の集落や町としての伝統的な連帯感が薄れるなど、地域の一体感やアイデンティティ[2]が減少、あるいは変質させられる可能性が懸念されている。

一方、京都府が策定した「新京都府総合計画[3]」では、地域特性の重視、交流・連携の促進を挙げ、また「丹後地域半島振興計画[4]」では、丹後の新たな魅力を引き出し、丹後の文化や自然を活かす地域振興の取組を重点政策としている。また、2004年4月、市町村合併によって誕生した京丹後市では、「京丹後市総合計画[5]」の中で、「ひと・もの・ことが行きかう交流経済都市」「暮らしの中でいのちが輝く環境循環都市」「共に築き、結び合うパートナーシップ都市」などを合併後の新たな目標として構想している。このように、地域の文化や自然を保全しながら、交流・つながりを基軸として地域の魅力を活かした地域づくりが重要視されはじめています。

本研究では、京丹後市を対象として、合併する前の旧町、旧村における日常的な生活文化にこそ、地域ならではの魅力があり[6-10]、それらの特質の総体・集合体が、京丹後市のアイデンティティを形づくっていくものと捉え、地域に内在する人間・社会・文化・風土など、地域発展にかかわる潜在的資質の再発見とその利活用を通して、住民が主人公となりえる内発的地域活性化[11-12]を志向し、それら潜在的資質を市内全域の各自治体単位で捉えることにより、京丹後市全体としての特質が見えてくるものと考えます。

本研究では、地域住民の地域づくりに対する意向調査を踏まえながら、京丹後市旧6町231自治体における地域資源・地域の魅力を探り出し、京丹後市における地域づくりの基本的指針としてのアイデンティティの特質について検討することを目的とする。

2. 調査対象地

2.1 京丹後市の概要

京都府京丹後市は、2004年4月に京都府北端部の丹後半島に位置する旧6町(峰山町、大宮町、網野町、丹後町、弥栄町、久美浜町)が合併して誕生した。自治体数は231、

人口は65,129人(2005年4月1日現在)、面積は501.84km²を有する。同市は、大陸文化の窓口として栄えた歴史を感じさせる遺跡や古墳が数多く存在する。また、海や山といった自然に囲まれていることから、農林漁業が盛んに行われ、自然環境を活かした観光業や、丹後ちりめんを中心とした繊維業が発展してきた。

2.2 概観した京丹後市における地域資源

文献資料やパンフレット[13-15]などの既存資料から、以下のような分類で、京丹後市の地域資源を概観した。

1)「自然的資源」：内山ブナ林(大宮町、以下(大))、琴引浜(網野町、以下(網))、袖志の棚田(丹後町、以下(丹))など。2)「人的資源」：紺屋(大)、鍛冶屋(久美浜町、以下(久))など。3)「生活文化的資源」：宝物虫干し(峰山町、以下(峰))、百度打ち(丹)、船木の踊り子(弥栄町、以下(弥))など。4)「歴史的資源」：赤坂今井墳丘墓(峰)、銚子山古墳(網)、豪商稲葉本家(久)など。5)「産業的資源」：天女の里(峰)、間人温泉郷(丹)、丹後あじわいの郷(弥)など。

これらの資源分布を地図上にプロットし、京丹後市におけるアイデンティティの捉え方を考察した。

3. アンケート調査

3.1 アンケート調査の概要

2006年9月、京丹後市における全231の自治体を対象として、アンケート調査を実施、アンケートの記入は、各自治体の区長に依頼した。

全回答数は、131件(回収率56.7%)、うち有効回答数は、110件(峰18、大11、網14、丹21、弥11、久35)、同47.6%であった。

アンケート項目は、フェースシート項目、市町村合併による自治体に対する意識、今後の地域づくりに対する考え方、地域づくり活動の実態、各自治体が自覚している地域資源、年中行事の実態などで構成した。

3.2 市町村合併に対する各自治体の意識

市町村合併に対する自治体の意識について、京丹後市全体では「大きな市になり自分たちの集落の存在が薄れることが心配になってきた」や「旧町のアイデンティティ(町らしさ)が消えて、寂しくなった」に対し、肯定的意識が見られた(図1)。しかし、峰山町ではこれらの意識が低く、他の町に比べ、あまり合併による危機感を抱いていないことが読み取れる。

町単位において、弥栄町では「1つの市になったので、他の町・自治体への関心が高まった」の意識が、他の町に比べ高く、町から市単位の視点を持つとする積極的

な姿勢を感じ取ることができる。また、大宮町および弥栄町で「[自治区主体による地域づくりに対する意識が高まった]」に対し、肯定的な意識が見られた。また、久美浜町では「1つの市になったので、他の町・自治区への関心が高まった」に対し否定的な意識を示している。

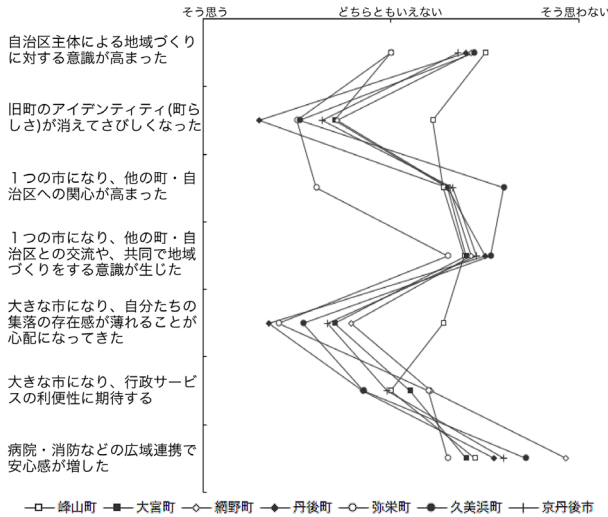


図1 市町村合併による各自治区の意識

3.3 今後の地域づくりに対する考え方

今後、市の発展のために重要視する産業について、京丹後市全体では「観光業」が81.0%、次いで「農業」が61.0%、製造業が54.3%であった。

峰山町において「製造業(94.1%)」が最も高い値を示したのは、一時代を築いた繊維業において、中心的な役割を峰山町が担っていたことに起因すると考えられる。

さらに、望ましい観光形態について聞いたところ、市全体では「農山漁村観光」が55.1%、「海の幸・山の幸グルメ観光」が48.0%であった。それに対し「大規模リゾート観光(2.0%)」、「スポーツ・レジャー観光(8.2%)」に対する要望は低いことが明らかとなった。

町ごとの特徴として、峰山町では「健康保養型観光」と「海の幸・山の幸グルメ観光」が、共に58.5%と高くなっている。また、大宮町および弥栄町でも「健康保養型観光」がそれぞれ63.6%、57.1%であった。網野町では「エコツーリズム」「歴史・文化めぐり観光」が、共に57.1%と、他の町に比べ高く支持されていた。

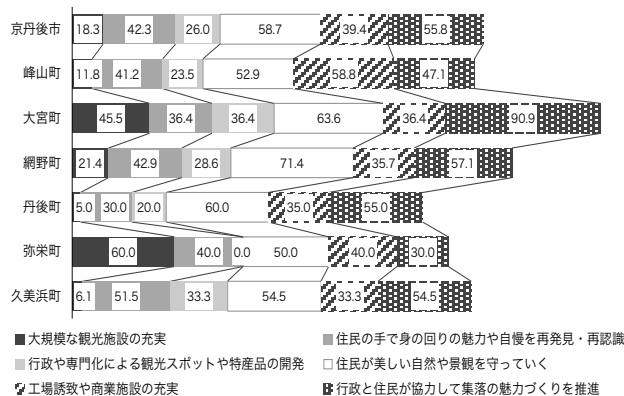


図2 地域の魅力づくりに対する意向

地域の魅力づくりに対する意向として、市全体では「住民が、美しい自然や景観を守っていく」が58.7%、「行政と住民が協力して集落の魅力づくりを推進」が55.8%であった(図2)。

町ごとでの特徴として、弥栄町では「大規模な観光施設の充実」が60.0%と他の町に比べ高かった。これは、町内に作られた国営農地、森林公園スイス村などに対する期待が高いことがうかがえる。また、峰山町では「工場誘致や商業施設の充実」が58.8%と他の町に比べ高い意向を示している。

3.4 地域づくり活動の実態

各自治区における地域づくり活動には「花いっぱい運動」「桜公園づくり」「伝統芸能の伝承」「酒づくり」「年中行事の復活」「文化学習塾」などの回答が寄せられた。その一方で「以前は活動していたが、現在は活動していない」「子供、若者が減少する中で、行事を続けることが大変」など、消極的な意見もあげられていた。

3.5 各自治区における地域資源

各自治区が自覚している地域資源について、1)身近な自然環境から得られる食材、2)それらの食材を用いて作る郷土料理や家庭料理、3)生活や生業を支えるために作られてきた道具類、4)自治区内で自慢できるもの、5)人的資源の存在、6)カヤ葺き民家の戸数および屋根材、7)イナキ(刈り取った稲を束にし、掛け並べて干す木組み)、ニウ(割り木を乾燥させ、保存する仕組み)の存在および使用状況、8)自治区内外でのものの交流などについて回答を得た。

上記1) 2) 3) 4) 5)の一部を表1に示す。

表1 アンケートにより得られた地域資源

食材	海の幸	アジ、カレイ、イカ、タコ、カニ、ハバノリ、イワノリ、アワビ
	山の幸	ワラビ、フキ、ヨモギ、ワサビ、サンショウ、マツタケ、イノシシ
	川の幸	アユ、イワナ、コイ、モズクガニ、ナマス、ウナギ
郷土料理 家庭料理	郷土料理	バラ寿司、フキ飯、ハバ飯、マツタケ御飯、トコロテン、カキミソ、
	家庭料理	トロロ、ラカンアエ、松茸汁、ヨモギ餅、イノシシ鍋、シカ肉鍋
道具	道具	ミノ、ムシロ、ゾウリ、カンジキ、セイタ、漁網、カゴ、ミ、フゴ、
	道具	タワラ、モズク取り、ウナギ筒
人的 資源	物知り	ものづくり、年中行事、郷土料理、冠婚葬祭、山仕事、海の話、動
	物知り	物、植物、郷土史、経ヶ岬灯台、アベサンショウウオ

海、山、川など周辺の自然環境から、ハバノリ、テングサ、ヨモギ、イノシシ、イワナ、アユなどの多様な食材を得ることができ、それらを用いたハバ飯やトコロテン、ヨモギ餅などの郷土料理や家庭料理が、他方、ワラ製品からモズク取りやウナギ筒まで、様々な道具が作られていた。また、ものづくりや郷土料理の他にも、山仕事、経ヶ岬灯台、アベサンショウウオなどについて詳しく語る人々がいるとの回答があった。

カヤ葺き民家の戸数は、京丹後市全体で18戸であった。それらの民家の屋根に使用されていた材料は、イナワラのみ(大5、久1)、ムギワラのみ(峰1)、イナワラとササ(大2、久1)、イナワラとススキ(弥3)、イナワラとササとススキ(久1)、その他(峰1、網1、丹1、

弥1)であった。それらの材料は単体で用いる場合と、複数種を組み合わせる場合があるが、最もよく使用されていたのは、イナワラであり、次いで、ササ、ススキであった。

自治区内にイナキがあるとの回答は 50 件(45.5%)あり、そのうち今も使用されているものは 36 件(32.7%)であった。また、自治区内にニウがあると回答したのは、29 件(26.4%)あり、そのうち今も使用されているものは、21 件(19.1%)であった。現存するイナキおよびニウの約 7 割が現在も活用されていることになる。

自治区内外における交流として、峰山町と網野町、久美浜町との間では、ナシ、ブドウ、メロンなどの果物、また、丹後町と弥栄町の間では、魚貝類のやりとりがなされていることが明らかとなった。また各地で、米、野菜、山菜、海藻、ちらし寿司、餅、ところてん、ワラなどが交換、流通がされていることが明らかとなった。

自治区内での自慢として大宮売神社祭典、太刀振り、菖蒲田植などの年中行事や、金刀比羅神社、経ヶ岬灯台、稲葉邸などの建築物、夕日ヶ浦海岸から見る夕日、依遅ヶ尾山、笹后山の大木などの自然や景観、その他にも慶徳院の襖絵、神輿、サルやイノシシ、雪穴など多数の回答が寄せられた。

3.6 年中行事の実態

旧 6 町の各町史から、あわせて 116 の年中行事を収集し、その実態について回答を得た。

京丹後市全体では、自治区あたり一年間に、平均 25.5 の年中行事を行っていることが明らかとなった。また、自治区あたりの年中行事数は、弥栄町が 35.7、網野町が 31.9 と高い値を示し、特に網野町御陵区においては、年間 70 もの行事が行われていることが明らかとなった。次いで、丹後町是安区、丹後町岩木区が、共に 49 であった。一方、各年中行事を自治区数でみると、墓参り(102)、雑煮(93)、餅つき(90)、3月の彼岸(89)、煮しめ(88)、おとそ(87)、地蔵盆(87)、節分(84)、かずのこ(82)、ひなまつり(82)、9月の彼岸(79)、秋祭り(79)などであった。また他にも「清正公祭」「山講」「幟立て」「行者山」

「大般若」など自治区独特の年中行事が各地で実施されている実情が明らかとなった。

4. フィールド調査

4.1 フィールド調査により得られた地域資源

地域に居住する人びとには気づきにくい、普段の何気ない生活の中に存在する地域の独自性や魅力を、外部からの目によって発見するためフィールド調査を行った。峰山町五箇、大成、大宮町奥大野、丹後町岩木、袖志、中浜、弥栄町野中、船木、久美浜町女布、品田などの集落に出向き、主に聞き取り調査を行った。

調査で得られた地域資源を「食」「建」「営」「匠」「道」「集」の6つのキーワードで整理した(図3)。以下にそ

の特色を概説する。



図3 フィールド調査によって得られた地域資源

1)「食」：当該地域は周囲を海や山に囲まれており、そこから得られる豊かな食文化が存在する。例として、山中には、イノシシやシカ、ウサギなどが生息しており、市内を巡る清流には、ウナギやアユなどの姿を見ることができる。それらを狩猟し、食材とする食文化が今も息づいている。また、海には様々な魚類、海藻類を有し、季節によってイワノリやワカメ、カレイなどを乾燥させている食の風景を目にすることもできる。

2)「建」：地域の風土に適応する建築物。峰山町五箇集落には、箱棟形式のカヤ葺き屋根が昔のままの姿を残している。また、久美浜町女布集落などには、カヤ葺き屋根の破風部に「水」の文字が表現されるなど、家屋を火災から守る人々の切なる思いが見て取れる。また、丹後の集落で散見できる土壁の土蔵群が、地域景観の形成要素となっている。

3)「営」：海や山に囲まれた当該地域において、農業や漁業など様々な営みの存在に出会うことができる。かつて丹後の主産業のひとつであった繊維業では、集落によって養蚕、紡績・機織りなど、仕事の分担・連携という集落毎のつながりをみることができる。また、丹後町中浜集落では、漁師によって網漁、釣漁、磯漁の3種類の漁法に分かれており、それぞれが得た魚や海藻などを交換するといった補完関係が存在する。

4)「道」：道には、直接的、間接的に演出された「しつらい」が存在する。弥栄町船木集落の入り口に建てられている「通り蔵」は以前、建物の下に道が通っており、集落を出入りする際は、蔵の中を通り抜けなければならなかった。蔵の内部に道祖神が置かれ、出入りする人々の安全を見守る役割を果たしていた。他にも、道端にはイナキやニウなどの、暮らしの知恵を活かした生活の証、道のしつらえを、文化的景観として見ることができる。

5)「匠」：自然を活用する知恵から生み出された生活の技、生活用具を見ることができる。当該地域のいたるところで、ナワ、ミノ、ムシロ、ゾウリ、ワラジ、カンジキ、セイタ、カゴ、ミ、フゴ、タワラ、モッコ、ぱっち

よう笠などの生活用具が作られ、周囲の集落に流通し使われてきた。また、農業を営むかわらで作られたワラナワは、漁を営む集落に提供され、それを用いて漁網が作られていた。このように、生活や生業を支えるものづくりにおいて、集落間の様々な交流・補完関係の存在を、京丹後市の特質として見る事ができた。

6)「集」:アンケート調査からも確認してきたが、今も、多くの自治区で、墓参り、彼岸、秋祭りなどの年中行事が行われている。例えば、8月に催される地蔵盆では、大人から子供までが集い、花や団子をお供えし、世間話を楽しみながら、コミュニティの結束が図られている。

5. まとめ

1)半数以上の自治区が、市町村合併によって自分たちの集落のアイデンティティや存在感が薄れてしまうのではないかと危機感を感じていることが明らかとなった。

2)今後重要視すべき産業として、「観光業」「農業」を挙げている。また、観光形態として、「農山漁村観光」「海の幸・山の幸グルメ観光」を多くの自治会が望んでおり、自分たちの地域の潜在資質を活用してできる内発的な発展を望んでいることが読み取れた。

3)今後、「住民が、美しい自然や景観を守ってこそ」「行政と集落住民が協力して集落の魅力づくりを推進していくこと」で地域の魅力づくりを進める意向を示していることから、住民が主体となり、行政と協力しつつ地域づくりを行おうとする住民の意向をうかがうことができた。それらは、「伝統芸能の伝承(大宮町延利区)」「年中行事の復活(網野町郷区、弥栄町鳥取区)」「文化学習塾(久美浜町向町区)」などの地域づくり活動において徐々に実現化されはじめているようである。

4)峰山町では、他の町に比べて、町村合併によるアイデンティティや存在感に対する危機感はあまり見られず、他の町との違いが明らかとなった。これは、峰山町が、城下町として栄えてきた歴史的自負や、合併前は各町に配置されていた町役場が交通や地理的利便性から峰山町に統合され、市の中核としての機能を担うことになったという経緯などが、その背景にあるものと推察される。

5)今も市内全域で数多く残る年中行事には、「清正公祭」「山講」「幟立て」「行者山」「大般若」など自治区独特なものが見られる。また、「通り蔵」や様々なものづくり形態など集落の生活文化から生み出された独自性こそが、自治区単位の小さな魅力として輝き、結果として、その集合体が京丹後市アイデンティティを形成すると見なすことができる。

6)地域風土に適応すべく生み出され、住民の生活を支えてきたニウやイナキなどの造形文化・地域景観や、地域共同体・コミュニティの維持装置として機能してきた様々な年中行事などは、今も多くの自治区でその姿を残しており、京丹後市内を彩る地域アイデンティティとして、

また、自治区間の共通項目としての連携も含めて、それらの魅力を今後発信できると考える。

7)漁網やワラナワなどを通した自治区間交流は、住民の生活や生業をお互いに支え合う役割を果たし、また、魚や米など周囲の自然環境から得られる食材の交換は、より豊かな食文化をもたらしてきた。それら、自治区内外における物的・人的交流は、京丹後市の活性化のためのネットワークとして活用できると考える。

8)自治区内で自慢できるものとして、「太刀振り」「金刀比羅神社」「経ヶ岬灯台」「笹后山の太木」「神輿」などが多数挙げられたということは、住民の地域に対する誇りや、残し伝えたいと思う気持ちが強く反映された結果と考えると同時に、それらはまさに、住民がつくり出した地域アイデンティティの実体であり、今後の地域づくりにおいて活かされるべき地域資源といえよう。

9)さらに、それらの資源について語り伝えることのできる人々の存在は、地域づくりの過程において欠くことのできない重要な人的資源である。

本研究では、合併後の住民の意識から、今後の地域の魅力づくりに対する意向を汲み取り、地域内部および外部から地域の潜在的資質を見つめ直すことで、これからの地域づくりにおける基本的な方向性を、京丹後市のアイデンティティという視点から検討してきた。しかし、ここで取り上げた地域資源や調査の視点は、まだほんの一部に過ぎず、今後も数多くの現地調査を経験していく中で、京丹後市のアイデンティティ形成や内発的な地域づくりに関わる新たな視点を探求していきたい。

注:

[1]全国の市町村数は1999年3月31日と比べ1412減少し、2006年3月31日には1820となった。総務省、合併相談コーナー、<http://www.soumu.go.jp/gapei/Index.html> [2]三橋俊雄、地域のアイデンティティ、日本デザイン学会編、2003、デザイン事典、朝倉書店、pp266-267 [3]京都府、2001、むすびあい、ともにひらく新世紀・京都-新京都府総合計画 [4]京都府、2006、丹後地域半島振興計画 [5]京丹後市、2005、京丹後市総合計画 [6]佐藤謙編、2001、丹後地域文化オープンカレッジ、立命館大学 [7]磯部康一ら、2000、地域資源の再発見・再認識に基づく地域振興計画の提案、デザイン学研究第47回研究発表大会概要集、日本デザイン学会、pp408-409 [8]植田憲ら、2001、内発的発展論に基づく地域連携計画、デザイン学研究第48回研究発表大会概要集、日本デザイン学会、pp334-335 [9]佐藤長雄、1994、山村からのメッセージ、日本デザイン学研究特集号 地域の「華」づくりとデザイン、日本デザイン学会、pp28-32 [10]佐藤平、1994、魅力ある集落づくり、前掲※9、pp40-43 [11]鶴見和子、1989、内発的発展論、東京大学出版会 [12]三橋俊雄ら、1992、地域開発計画の型分類に基づく内発的計画の特質、デザイン学研究 No. 94、日本デザイン学会、pp51-58 [13]京都府立丹後郷土資料館、1994、竹の達人木の職人 [14]京都府立丹後郷土資料館、2000、丹後・海の100年 [15]三たん地方開発促進協議会、2000、三たん事典「人と祭り」編、三たん地方開発促進協議会